
コンプレックス・ラブ

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンプレックス・ラブ

【著者名】

ゆづ

【あらすじ】

髪が突然変異で紫色をした少女、りか。彼女は先生に恋をする。

(前書き)

お読みになつた後は出来れば評価、感想をください。-(切実)

「紫」どこかでこの単語を聴くだけで反応してしまつ。そんな自分が大嫌い。あたしは、ずうつとこの髪がコンプレックスだ。だつてあたしは髪の色がムラサキ色。ムラサキ頭なんて、どんな国にだっていないよ。聞いたことない。

とうの昔に離婚した両親に幼いあたしは聞いたことがある。どうしてあたしの髪の色はこんな色してるのって。両親は真っ黒なのに。するとママは「突然変異なのよ」と言った。そんな理由では納得出来ない。

小学校の時はこの髪のせい「宇宙人」ついじめられてた。だからあたしはそいつらをぶつ飛ばしてやつた。そしていつしか言われなくなつていつた。

外に出れば道ゆく人々の視線は釘付けになり、バイトの面接には一発で落ちる。あたしは全て何もかも上手くいかないのはこの髪のせいだ、と考えた。あたしと云う「人間」はまず切り捨てられる。あたしは無視されて、皆この髪に関心がいつているのがわかる。

こんなに目立っちゃうくらいなら、とあたしは高校1年生のとき開き直つてギャルになることにした。とにかくギャル雑誌を買い読みあさつた。今ではめでたく友達も出来た。あたしは日焼けサロンに通つているせいで、白かった肌が真っ黒だ。まつ毛はぱさぱさと風がそよぎそよな程長いシケマッシュをつけ、鼻ピアスもしている。

「渋谷で待ち合わせねー」

あたしは今日、友達のさゆりと渋谷で遊ぶことにした。

二人で渋谷の街をウインドウショッピングしながら歩いていると向こうからショートカットの痛みまくりの金髪に大きなわつかのピアスが印象的な派手な細身の女と、黒い髪に濃いアイメイク、眉毛のないゴスロリ風のぱつちりとした厚底を履いた女が歩いてくる。何とも対照的で不釣り合いなコンビだ。

すると一人は、街中でも一際目を引くあたしの髪を見ると一笑した。黒髪が「なにあれ、今時ガングロおー？」と言つと金髪が「ださいよなつはは」と言つたのであたしは「何だと」と言わんばかりに無言で金髪の方を睨み凄んだ。金髪は「何見てんだてめえ、ああ？！」と逆ギレしてきた。

街ゆく人々は私たちを驚いた顔で見はするものの、無視していた。そして所詮他人事、という顔でどこかこそとしている。

金髪は私の左すねに蹴りを入れてきたのであたしは次の間合いで相手の左頭を力任せに殴つた。ダイエットのために毎日50回は腕立て伏せをしたかいあつて、一発で相手はぐらりとよろめき、うめきながら倒れた。

さゆりと黒髪は止めよう、という体制に入つていたが思つたよりも早く決着がついたので少し安心したようだつた。

「りか勝つたね」

「当然じやん」

見事あたしは勝利したのだつた。

あたし達は空が暗くなつて來たのでその日はもう帰ることにした。あたしは生まれてから彼氏というものの存在を知らない。皆は彼氏彼氏つて騒ぐけれどあたしにはいまいちピンと来ない……訳ではない。実は。あたしだつて彼氏は欲しい。けれどこんなド派手な外見とは裏腹にあたしつて結構シャイなんだよね。なんていうかブランドものと同じような感覚でナマモノの人をそれも人の口コロ口を手に入れるつていう感覺も信じらんない。あたしみたいな人は大正くらいの時代に生まれてたら良かつたのかも。ギャルだけど17歳で末だにバージンだし。

今日も帰り道にナンパされる。でもシカトする。あたしは狼同然の男について行つちゃうほどチャラくないから。それにどうせ皆あたしの髪しか印象に残らないだろつし。

電車に乗つて家に帰る。おやすみなさい。

次の日。

あたしは久しぶりに学校に行くことにした。その日は補習を受けることになってしまった。あたしの名前はりかなのに、理科は苦手だった。だから他の教科は平均点なのに理科だけは赤点だった。

だから、理科担当の滝川の補習。

滝川は率直に言つと、顔が良かつた。眼鏡を掛けているのだが、知的そうでとても似合うのだ。

他の先生たちはやつぱりあたしを外見だけで判断して、皆あたしを厄介者でとつつきにくいとも言つよう、怯えた目で見る。あたしにはそれが手に取る様に解る。だからあたしは反抗したくなる。そんな大人たちを見てるとイライラして。

「大富は、明日も補習だよ」

滝川先生は言う。

あたしが滅多に学校に来ないせいで。

けれどあたしは正直滝川先生の顔を見れるだけでも嬉しかった。目の保養にもなるし。

これは恋なのかな。そう思つた。

補習中。滝川先生はあたしの髪をじっと見る。あたしはその眼差しにどきどきした。すると

「大富の髪はキレイだよな、いい色してるよ」

と云つた。その言葉が、どれだけあたしを救つたことだろう。

「…ありがと」

あたしは、云う。照れながら、ムラサキ色した髪を思わず触つた。つるつるとした感触だった。

あたしは初めて本当に人に認められた気がした。あたしの中の何かがすうすう、と流れしていく。とても気持ち良い。こんな感覚は初めてなのだ。どんなに擦つても落ちないずっと凝り固まっていた、こびりついていた「汚れ」を全て拭ってくれる魔法のボディソープの様に。その言葉はあたしをキレイへ導いていく。

その日からあたしはギャルを卒業することにした。髪の色こそどんなにいいヘアカラー使っても変わらないけれど、大富は大富でいい

んだよ、と滝川先生があたしを受け入れたのを、言ってくれたのをきっかけにあたしはこれからは出来る限りナチュラルメイクすることにした。日焼けサロンに通つのも辞め、美白に専念することにする。

滝川が好き。

あたしはその気持ちに目をそらすことなど到底出来ない。

あたしはその日補習はなかつたけれど、学校へ向かつた。滝川先生に会いたいから。自然と足どりは軽くなつた。

放課後は、夕陽がきれいだつた。そのままゆい光は滲んでいて、昔ママが持つてたダイヤモンドを通して見た蛍光灯の光みたい。けれど毎日あたしを感動させるオレンジ色の光の命は短い。間もなくベタを塗りつぶしたような闇が訪れる。交代の時がやつてくる。こうして1日が終わっていくんだ…。

うちのクラスの教室はちょうど夕陽の光があたる。あたしは教室に射し込む夕陽が一番キレイな時に滝川に告白したかった。

朝のうちに滝川に放課後、この時間に教室へ来てねと言つ。もう勘づいてるかも知れない。あたしが滝川を好きつてこと。でも滝川は頭が良いのに意外と鈍感だから、それはわからないけれど…。

あたしは教室で彼を待つ。

5分くらい待つと、彼は来た。

教室の引き戸の窓の部分の曇つたガラスにぼんやりと滝川のシルエットが浮かぶ。そしてあの少し癖のある歩き音。

クラスメイト達は殆ど部活や帰宅で居なかつたが、いつもの放課後のお喋り組はさゆりが上手く外へ移動させてくれたのだった。

滝川が教室へ入つてくると、オレンジ色の光が舞台の照明の様に一瞬にして全身をパッと包み、眼鏡の縁が光つて輝いて見えた。
(好き…いや好きです…わかり易く…言わなくちゃ……)顔が火照つってきた。

「…すき…」

自然と心から口へと、想いが漏れた。

滝川は一瞬眼鏡の奥の大きな目を見開き驚くと、口もとを歪め、くすり、と笑つた。

「何が可笑しいの！」

赤面しながらあたしが云つと、滝川はいつもの真面目な顔を取り戻し、

「いやつ……大富があまりに可愛いから」と云つた。

「僕も大富さんの笑いがおと、紫色のその髪がキレイだなってずっと思つてたんだよ。こちらこそ、宜しくお願ひします」

あたしは、嬉しくて思わず涙が零れた。線香花火みたいに終わるのではと恐れていたあたしの中で、想いが鼠花火みたいに弾けた。

思わず滝川に抱き着いた。

滝川もあたしを抱き締め返した。

(後書き)

…い、いかがでしたでしょうか？（汗）評価、感想を頂けると幸いです。お気軽にどうぞ。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953d/>

コンプレックス・ラブ

2011年1月21日15時07分発行